

1) 関西支部第7回学生論文発表会

有馬昌宏（ありま まさひろ）
兵庫県立大学応用情報科学研究科

関西支部の第7回学生論文発表会が、2011年2月18日（土）の午後2時から午後5時まで、大阪府立大学中之島サテライトを会場に開催された。関西支部の学生論文発表会は、関西支部の活動の活性化の一環として、大学・大学院で教育を受けて研究を行ってきた学生の研究活動の集大成の一つである卒業論文、修士論文、博士論文という研究成果を広く公表する機会を提供し、他大学の学生の論文発表を聴くことを通じて切磋琢磨し、優れた研究を顕彰することによってさらなる研究の発展へとつなげてほしいとの思いから、「経営情報学関連の論文発表の甲子園」を目指して2005年度から始められた事業である。

2011年度で第7回となる学生論文発表会であるが、ここ2・3年は卒業式や学位記授与式の終了後に開催日を設定したためか、特に社会科学系の学生に発表会への参加を動機づけることが難しく、発表者数も減少傾向にあった。そこで、今回は卒業式・学位記授与式が举行される前の2月の開催とし、日本情報経営学会関西支部の協賛も受けて、学部卒業論文発表者3名、修士論文発表者2名、博士論文発表者2名の参加を得て、発表も内容も、さらに質疑応答も非常に充実した発表会とすることができた。

全発表者の発表後に、出席した支部役員（支部長の有馬昌宏、副支部長の宗平順己、前支部長で支部運営委員の福井誠、学生論文発表会の運営責任者で支部運営委員の森田裕之）で審査委員会を構成して審査を行い、優劣がつけにくいなか、3名の発表者に最優秀発表賞を、選にもれた4名の学生に優秀論文賞を授与することにし、学部卒業論文の部、修士論文の部、博士論文の部でそれぞれ司会を務めた有馬支部長、宗平副支部長、福井運営委員からの講評の後、表彰式でそれぞれの学生に表彰状と記念品を授与した。

今回の学生論文発表会での発表者と所属と論文タイトルは以下に示すとおりであり、○をつけた発表

者が最優秀発表賞の受賞者である。

学部生の部（13:00～14:00）

（発表10分：質疑5分）

「企業不祥事の社会問題化—社会構成主義的アプローチからの一考察—」

棚田祥太（神戸大学経営学部）

「排出権取引の政治的過程—アクター・ネットワーク理論のもう一つの可能性—」

岡田華奈（神戸大学経営学部）

「萌え要素の形式合理性と声優のカリスマ

—二次元美少女キャラクターの大きな物語と声優の小さな物語—」

○ 村佐浩章（神戸大学経営学部）

「効率的なクーポン対象者を決定する予測モデルに関する研究」

鳥井友香子（大阪府立大学経済学部）

修士（博士前期）課程の部（14:15～15:05）

（発表15分：質疑10分）

「ECサイトにおけるページ閲覧行動分析とページ推薦」

阿部寛康（同志社大学大学院文化情報学研究科）

「シーケンシャルパターンを利用した異常検知アルゴリズムの研究」

片岡弘貴（大阪府立大学大学院経済学研究科）

博士後期課程の部（15:25～17:25）

（発表20分：質疑10分）

「ギフト消費市場における消費者行動モデルを基礎とした非価格プロモーションの戦略」

○ 辻本法子（大阪府立大学大学院経済学研究科）

「スモールワールドネットワークを用いた人工市場シミュレーションの研究

—ローカルネットワーク外部性を伴うサービス普及の分析—」

○ 小澤 順（大阪府立大学大学院経済学研究科）

本年度も第8回学生論文発表会を開催する予定である。発表者の所属は関西支部だけに限定はしていないので、多くの学生の皆さんの参加をお待ちしている。

最後に、本発表会を開催するにあたり、多くのご支援を受けた大阪府立大学経済学部に感謝申し上げます。



2) 関西支部平成24年度第2回支部講演会報告

有馬典孝（ありま みちたか）
兵庫県立大学応用情報科学研究科

関西支部の2012年度第2回講演会が、日本情報経営学会関西支部との共催で、2012年7月7日（土）の午後3時から午後5時まで、大阪市立大学国際交流センターセミナー室を会場に、日本銀行システム情報局新日銀ネット構築課長の浅田徹氏を講師にお迎えし、「日本銀行の情報システム—日本銀行金融ネットワークシステムの役割と機能」との演題で行われた。

講演は、①日本銀行（以降「日銀」と略記）について、②資金決済における日銀の役割、③日本銀行金融ネットワークシステム（以降「日銀ネット」と略記）について、④新日銀ネットの構築、の四つのパートに大きく分けて行われ、まず最初に、日本銀行法で規定されている日銀の目的から始めて、支店・事務所の所在地や職員数など、日本銀行という組織についての概説がなされた。

次に、日銀の役割について、「親から大学生の子

への仕送り」を例にした説明がなされ、銀行間の送金においては、効率のよい集中処理（ネット決済）のために2009年度末で556の金融機関が保有している「日銀当座預金口座（日銀当預）」が利用されていることが解説された。より具体的には、金融機関の間の決済に用いられる全銀ネット、手形や小切手の決済を行う手形交換制度、海外との決済を行う外為円決済制度などにおいて、決済では日銀当預が使用されているとのことである。

つづいて、1988年度から稼働している日銀ネット（日銀の本支店と金融機関を結ぶコンピュータ・ネットワーク・システムで日々100兆円を超える巨額の決済がなされている）の説明が行われ、日銀ネットの特徴として、口座数は民間金融機関と比べはるかに少ないものの、特定の大手金融機関の口座に短時間のうちに多数の処理が集中することが紹介された。そのほかに、日銀ネットの主要な処理

機能の例として、社債や国債と資金の振替を同時に行うことを保証する「DVP (Delivery Versus Payment)」, 待機中の振替指示の中から同時決済可能な組み合わせを探索し実行する「流動性節約機能」, 大口の内国為替には決済の一括処理 (ネット決済) を行わずに 1 件ずつ処理する「大口内国為替 RTGS (Real Time Gross Settlement)」といった機能が紹介された。

最後に、2010 年 4 月から開発中である新日銀ネットについての解説がなされ、新日銀ネット開発に至った現行日銀ネットの問題点として、①最新の技術を取り入れることが困難になってきたこと、②長年にわたる改修・機能追加の結果としてシステムが複雑化し環境変化への柔軟な対応が難しくなってきたこと、③システム構造やプログラミング手法といった設計思想が近年のニーズに対して応えられなくなりつつあること、の 3 点が挙げられた。新日銀ネットの開発コンセプトは、①最新の情報処理技術の採用、②変化に対して柔軟性の高いシステムの構築、③アクセス利便性の向上、の三つであり、そのためにプログラミング言語やデータベース管理ソフトウェアに最新のシステム技術が採用されているのはもちろんのこと、多層構造の採用およびプログラムの部品化によって柔軟なシステムを構築することが目指されている。新日銀ネットは国債の入札やオペ (オペレーション：公開市場操作) 等、一部業務

についての先行稼働を 2013 年に開始することを目処に開発が続けられており、2015 年を目処に日銀当預決済や国債決済関連業務などを含めて本格稼働を開始したいとのことであった。

以上の講演の後、質疑応答に移り、日銀ネットという特殊なトピックということもあり活発に質問が行われた。新日銀ネットの開発にあたっては、内外のミッション・クリティカルなシステムの動向を参考にしているとのことであった。また、「情報技術の利用」ではなく「情報の活用」という観点から日銀の政策への情報の応用は行われているかどうかとの質問に対しては、現在のところは業務の意思決定に使えるような情報活用は限定的であるが、将来的に、情報の政策へのより一層の応用についての議論は日銀内でも行われているとの回答であった。

